

# 副詞「いかにも」「さも」「まるで」「まさに」 について

李 津安

キーワード 陳述副詞 文末表現 徴候性判断 話し手 個人的判断

## 0. はじめに

日本語副詞「いかにも」、「さも」、「まるで」、「まさに」は意味の上で類似しており、辞書類の意味記述がいくつかあるのみであるため、外国人日本語学習者にとって、紛らわしい副詞である。本稿では、まず先行研究における問題点を検討し、「ようだ」「みたいだ」「らしい」「(し) そうだ」などの文末表現を手がかりにしつつ、モダリティの概念を視野に入れ、「いかにも」、「さも」、「まるで」、「まさに」の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

先行研究では四つの副詞の個別的な説明や分析を行っているが、話し手の個人的判断から四つの副詞の違いについて説明していない。また、これらの副詞はいずれも「ようだ」「みたいだ」「らしい」「(し) そうだ」などの文末表現と呼応して使うが、先行研究では、その呼応関係の特徴については言及していない。この呼応関係を把握することは外国人日本語学習者にとってとても重要なことである。本稿は先行研究の不十分なところを明確にし、四つの副詞の全体像を概観する。その上で、外国人日本語学習者にとって、より分かりやすい説明をまとめていくことにする。

「いかにも」「さも」「まるで」「まさに」はいずれも伝統的な副詞の下位分類における陳述副詞に属するとされる。「陳述副詞」は、叙述内容の量の増減に影響せず、主に仮定したり否定したりする話し手の個人的態度を示すものであるというように見解で一致している。また、工藤(2000)によれば、この四つの副詞のうち、「いかにも」は後接の文末表現によって、陳述副詞の下位分類「比況副詞」「譲歩副詞」及び「確認・同意副詞」の三つの領域に属する。したがって、「いかにも」はこれら四つの副詞のうち、使用範囲が一番広いと思われる。本稿は「いかにも」を中心に分析することにする。

まず、1節では「いかにも」と「さも」の比較を行う。2節では「いかにも」と「まるで」、「いかにも」と「まさに」及び「まるで」と「まさに」の比較を

行う。3節はまとめである。「さも」と「まるで」及び「まさに」との違いは比較的はっきりしているので、本稿の直接の考察の対象外とする。

## 1. 「いかにも」と「さも」

### 1. 1 先行研究

飛田・浅田(1995)によれば、『『いかにも』は①典型的な状態に合致している様子を表す。述語にかかる修飾語として用いられる。②相手のいうことを無条件で肯定する様子を表す。』また、森田(1989)によれば、『『いかにも』は形容詞・形容動詞、ならびにそれに準ずる語(名詞)に係って、全体として連体修飾語か連用修飾語となることが多い。『いかにも……そうな……/いかにも……らしい……/いかにも……ような……/いかにも……だ』の形式が圧倒的に多い。』

一方「さも」については、飛田・浅田(1995)は以下のように述べている。『『さも』は対象の状態の外見が話者の目にはある典型的な状態によく似て見える点にポイントがあり、実際に主体がそのように意図しているか、事実はどうかについては言及しない。そこで、断定的な文の述語にはかからず、述語を修飾語句として様態の内容を説明するにとどまることが多い。』また、森田(1989)は『『さも』は意志的な態度・行為・行動以外には用いられない。』と述べている。さらに、田忠魁(1998)によれば、『『さも』は本当にそうではないのに、いかにもそれを[真実]らしく見せかける』という第三者の意志的な態度・行為を表す。』

先行研究は、『『さも』は意志的な態度・行為・行動以外には用いられない。』というふうに述べているが、不十分である。話し手は目の前の状況を推測し、「いかにも」や「さも」を使って、いろいろな徴候性に基づき結論を下すが、先行研究では、相手の状況や意識及び行動に重点を置き、話し手の感じや個人的判断の過程について言及していない。

### 1. 2 「いかにも」と「さも」によって述べられる対象

「さも」は意志的な態度・行為・行動以外には用いられないと先行研究が主張している。意志的な態度・行為・行動を遂げるのは人間しか考えられないから、「さも」は人間にしか使われないと理解できる。しかし、そうではない場合がある。

- (1) 馬のそのあちらこちらを軽快に駆け回るさまは、いかにもこの儀式の大切なことを心得ていて、**さも**自分の上手な整理ぶりに関心しているかの**よう**でした。『ビルマの堅琴』

例(1)の述べられる対象は駆け回る馬であり、生物である。馬は人間ではないから、意志的に態度・行為・行動をとれない。これは先行研究の主張と違う。つまり、「さも」は人間だけではなく、他の生物にも使えると考えられる。ただし、以下の例から「さも」は無生物に使いにくいと分かる。

- (2)\*雨は**さも**激し**そう**に降っている。[作例]

一方、「いかにも」は生物にだけではなく、無生物にも使える。

- (3) この時に、監督のインド兵が**いかにも**怒った**ような**顔をして駆けて来ました。『ビルマの堅琴』

- (4) 「星の光が東京とまるで違うね。**いかにも**宙に浮いているね。』『雪国』

(3)の述べられる対象はインド兵であり、生物である。(4)の述べられる対象は「宙に浮いている」星の光であり、無生物である。

話し手は目の前の状況の徴候性に基づき、個人的判断を下すが、その個人的判断の度合いは「いかにも」か「さも」かによって、違ってくる。「いかにも」は生物と無生物両方に使えるから、話し手は相手からの影響を受けずに自己判断が出来ると考えられる。「さも」は生物にしか使えないことから、相手からなんらかの合図をもらわなければ、判断しにくく、個人的判断の度合いが「いかにも」より低いことがわかる。「いかにも」と「さも」のほかの面からもこの傾向が見られる。

### 1. 3 「いかにも」と「さも」の構文上の特徴

先行研究によれば、「いかにも」は連体修飾語か連用修飾語となることが多い。「さも」は断定的な文の述語にはかからず、述語を修飾語句として様態の内容を説明するにとどまることが多いというふうに説明している。これは以下の例文から分かる。

- (5) 最近の雑誌や一部の新聞の記事には事実を大きさに伝えるものもある。…情報を伝える側として一番問題なのは、情報が不確かなうちに、**いかにも**事実のように伝えることがあるという点だ。(朝日新聞)
- (6) **いかにも**イギリスらしいゴーストですね。美しくて、怖くて、ミステリアスで。絶妙なバランスの映像です。私は本物と思いたい。

(<http://www.seg.co.jp/cgi-bin/kb7.cgi?b=sss-website&c=e&id=399>)

(5)の「いかにも事実のように伝えること」の「いかにも事実のように」は連用修飾語を構成し、「伝える」という用言にかかっているが、(6)の「いかにもイギリスらしいゴーストですね」の「いかにもイギリスらしい」は連体修飾語を構成し、「ゴースト」という体言にかかっている。

(7) Kは昨日自分の方から話かけた日蓮のことについて、私を取り合わなかったのを、快く思っていなかったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと言って、なんだか私をさも軽薄もののように遣り込めるのです。『ころ』

(8)\*竹内さんの英語はさも上手そうだった。[作例]

(7)では「さも軽薄ものように」が「遣り込める」にかかっているのに、「さも」は連用修飾語を構成している。それに対して(8)では「さも上手そう」が連用修飾語を構成していないので「さも」は使いにくい。

(5)、(6)の「いかにも」は連体修飾語と連用修飾語となることができ、判定的な文に使えるが、(7)、(8)の「さも」は連体修飾語となることができず、判定的な文に使えない。このことから、「いかにも」と「さも」はともに話し手が目の前の状況を推測し、判断を下す場合に使われるが、話し手の個人的判断の度合いは「さも」より「いかにも」の方が高いと考えられる。

#### 1. 4 「いかにも」と「さも」と文末表現

「いかにも」と「さも」はそれぞれ「(し) そうだ」「ようだ」「らしい」などの文末表現と呼応することができる。話し手の個人的判断の度合いの違いはこの呼応関係から現れてくる。

##### 1. 4. 1 「(し) そうだ」と呼応する場合

仁田(2000)によれば、「(し) そうだ」は「状態把握様相」と「出来把握様相」という二つの種類に分かれている。「さも…そう」は話し手が「表面的現象」に主眼があり、「状態把握様相」にとどまることが多い。「さも…そう」は事態から生じる現象や事態の有している特性・側面を捕捉することによって、事態の成立・存在を捉える場合には用いられない。「いかにも」や「さも」は「(し) そうだ」と呼応する場合は、目の前の事態をある特徴や証拠によって推量し、判断することを表すので、将来のこと(「出来把握様相」)に適用されないと考えられ、「状態把握様相」しか表すことができなれないと思われる。

(9) a. \*練習があまりに厳しいので、部員たちは {いかにも／さも} 逃げ出

しそうにしている。 [作例]

- b. 練習があまりに厳しいので、部員たちは {いかにも／さも} 逃げ出したそうにしている。 [作例]

(9 a) は「逃げ出す」という動き動詞とともに用いられているので、「(し) そうだ」は出来把握様相を表し、この場合「いかにも」と「さも」は不自然であるが、(9 b) のように、「逃げ出したい」とともに用いられれば、「(し) そうだ」は状態把握様相を表すことになり、この場合は「いかにも」と「さも」はより自然になる。

- (10) 一通の電報は、少しの劇的な要素なく、太郎の手許に届けられた。昼食の直前で、鶏のフライを揚げていた母の信子が {さも／?いかにも} 面倒くさそうに、玄関に出ていてそれを受け取った。(中略) 太郎が二階から下りて来た時、母は早くもてんぶら鍋の所に戻っていた。『太朗物語』
- (11) 三原は昨日あった安田の風貌を思い浮かべた。切れる男ということは彼にも分かる。愛嬌のいい、まるこい目には、{いかにも／\*さも} 商売にかけてソツのなさそうな、よく働く瞳があった。『点と線』

(10)の母の信子さんが料理を作っている途中で電報の受け取りに邪魔され、面倒な様子・印象を話し手が捕捉するが、本当に面倒だと思うかどうかのような事態の側面・特性から推量しなければ分からないことについては話し手が捉えない。「いかにも」に置き換えると、同じ「状態把握様相」ではあるが、話し手が事態の有している特性・側面から推量した上で、母の信子さんが確かに面倒だと思っていることが読者に感じられるようになる。(11)の「ソツがない」は表面的に観察される様相にとどまらず、人間の内面にかかわる印象であり、このような場合「さも…そう」は使いにくい。

「いかにも」と「さも」は文末表現「(し) そうだ」と呼応する場合、「いかにも」は目の前の状況に対して、外面的なものにとどまらず、内面的なものも考慮し、確信度が高い結論を出すことに対して、「さも」の話し手の個人的判断は相手の外面的な徴候により出されるものである。

#### 1. 4. 2 「ようだ」と呼応する場合

仁田 (2000) は『『ようだ』においては現に存在している状況が、事態存在の徴候や証拠をなしている。言い換えれば、知覚され捕捉されているのは、徴候たる状況であり、命題内容たる事態は、その徴候から引き出され成立させられていると述べた。つまり「徴候性判断」である。」というふうに定義している。「いかにも」と「さも」は文末表現「ようだ」と呼応する場合は、以上の仁田

(2000) が定義した徴候性判断が文末表現「(し) そうだ」の場合よりよく見られる。

(12) 二人は朱の塗りぶちに吉野杉の骨の、がっしりした本間襖で、刷毛を持って向いあうだけで気持ちが引き締まり、**「いかにも／＊？さも」**「仕事を**する**」というところよい、昂奮が全身に感じられる**よう**であった。  
『さぶ』

(13) どんな社会でも、**「さも／いかにも」**理解がある**ような**ふりでいい子ぶつているやつが多い。普段、それは必要なものだから多少のことは妥協すべきだなどと、**「さも／いかにも」**理解がある**ような**ふりを**して**いて、いざそれが自分の身に降りかかると突然反対をするやつのことだ。

(<http://www.yk.rim.or.jp/h-hamada/main5/main5.html>)

(12)は事柄について話し手が事態から生じる現象を捕捉することを通して、事態を捉えるということである。「いかにも…よう」の場合は「…ように感じる」「…ように思う／思われる」などの意識を表す動詞がよく使われる。「いかにも…よう」はいずれも事態の有している特性・側面から事態を捉えることであり、その「特性・側面」は普通すぐ見極められず、抽象的に存在しているものが多い。(12)の『『仕事を**する**』』というところよい、昂奮が全身に感じられる**よう**であった」は、仕事を**する**二人の外見だけで分からなく、二人の気持ちや雰囲気などのような話し手の感覚しか感じられないものから捉えられたものである。「さも…よう」に置き換えられにくい。「さも…よう」は「いかにも…よう」と同じく事態の有している特性・側面から事態を捉えるが、「いかにも…よう」より表面的であり、具体的である。(13)は基本的に外見について述べており、「いかにも」と「さも」はいずれも徴候性の表現に用いられるので、両方とも用いることができる。

#### 1. 4. 3 「らしい」と呼応する場合

砂川 (1995) によれば、「文末表現『らしい』」は I 同じ名詞を繰り返し、その名詞の表すものの中の典型的なものを表す。例:あの人は本当に先生**らしい**先生ですね。[…] II 名詞に付き、そのものの典型的な性質がよく表れていることを表す。例:今日は春**らしい**天気だ。[…] III 文末に付いて、話し手がその内容をかなり確実度の高いことがらであると思っていることを表す。その判断の根拠は外部からの情報や観察可能なことがらなど客観的なものであり、単なる想像ではない。例:料理は**いかにも**即席で用意した**らしく**、インスタントのものがそのまま並んでいた。[…]

「いかにも」が「らしい」と呼応する場合は、「らしい」は基本的に I、II の

意味に相当する。つまり「ふさわしい」の意味を表す。

- (14) 僧はわれわれの方に向かって、静かに合掌しました。その合掌は**いかにも**坊さんらしく心をこめた礼だったので、こちらからも幾人がおもわず挙手しました。『ビルマの豎琴』

(14)の「いかにも…らしい」はその合掌は坊さんたちの典型的な合掌の特徴に一致している意味を表し、徴候性判断ではない。「さも…らしい」の「らしい」は「ふさわしい」の意味を表す場合が少なく、基本的に「らしい」のⅢの意味に相当する。つまり、以下の「徴候性－(実際には真でないという含意がある)」(15)或は「徴候性判断」(16)の意味を表す場合が多い。したがって、文末表現「らしい」と呼応する場合は、「いかにも」と「さも」は置き換えられにくい。

- (15) 栄さんは息抜きをするために上方のほうへ行っているなんて、**さもさも**本当らしく云ってあたしを安心させようとしていたのです。『さぶ』
- (16) けれども私の不安な眼つきやきよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく分かりませんが、なにしろ其所にはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと言って、**さも**尊重した**らしい**口の利き方をしたことがあります。『ころ』

#### 1. 4. 4 他の文末表現と呼応する場合

「いかにも」と「さも」はともに「ごとき」「みたいだ」「…げ」などの文末表現と呼応することができるが、違いがある。「いかにも」は「げ」「ごとき」「みたいだ」などの文末表現と呼応する場合は述べられる対象の外見だけにとどまらず、相手の外見以外の要素や話し手の個人的判断が必要になる。

- (17) 機動隊もさるもの、巧妙に、機能的に、組織的に、**いかにも**市民の治安を維持するごとき装いをもって徹底的に弾圧してくる。『二十歳の原点』
- (18) 「あれを飛び越すのだ」と講師が言った。私たちはそれぞれ馬に打ちまがってそのハシゴを越えた。老馬は**さも**物憂げに脚を上げ、ゆっくりとハシゴをまたいでいった。『風に吹かれて』

(17)の「巧妙に、機能的に、組織的に、市民の治安を維持するごとき装いをもって徹底的に弾圧してくる」などの行為は目で見るだけで得られなく、話し手が周りの情報や状況などに基づき、判断しなければ分からないものである。「さ

も」は、「いかにも」と同じく、「げ」「ごとき」「みただ」などの文末表現と呼応するが、相手の外見の記述にとどまることが多い。(18)は擬人化によって馬の様子を述べているが、馬の表面の姿に左右され、本当の状態についてあまり深く考えていない。

#### 1. 4. 5 呼応する用言の特徴

「いかにも」は「気がする」「思う」「感じる」などの意識を表す動詞と呼応する場合が少なくないが、「さも」は「見える」や「聞こえる」などの表面的な感覚を表す動詞と呼応する場合が多い。

- (19) 人から悪く言われると、**いかにも**、もっとも、自分がひどい思い違いをしているような**気がして来て**、いつもその攻撃を黙って受け、内心、狂うほどの恐怖を感じました。『人間失格』
- (20) **いかにも**そう言われてみると、こいつはへんに疲れて貧乏くさいだけの女だな、**と思う**と同時に『人間失格』
- (21) 頼国の家はこの二階建ての、木口のがっしりした、**いかにも**井のしもた屋といった**感じ**の家であった。『花埋め』

(19)~(21)の「いかにも」は「気がする」「思う」「感じる」など意識を表す動詞と呼応する。砂川(1995)によれば、『『気がする』『思う』『感じる』など意識を表す動詞が後接する場合は、『感覚・印象の内容を述べたり自分の主張を婉曲的に述べたりするのに用いる。』と述べている。したがって、「いかにも」は話し手の心理的な動きがポイントにあり、話し手の個人的判断が強いと分かる。

- (22) お前にもなんかあるかい、と言われると、吾一は黙っているわけにはいかなかった。これでは、**さも**何もできないように**聞こえる**。『路傍の石』
- (23) 彼は眼に入るすべてのものを憎み、それに挑みかかった。家並みを見れば、それが**さも**さも安穩な生活を楽しんでいるように**見えて**憎悪し、…『さぶ』

「さも」は相手に対しての記述は基本的に相手の外見状態にとどまる。相手の意識や思想などにあまり及ばないと考えられる。(22)の「聞こえる」や(23)の「見える」は感覚動詞として事態の有している表面的特性・側面を通して事態を捉えることであり、個人的推測が弱いと考えられる。

#### 1. 5 本節のまとめ

以上は「いかにも」と「さも」の相違と相関について分析した。二つの副詞

はともに「徴候性判断」を表すが、話し手の立場が違う。「いかにも」の場合は、話し手が目の前の状況や様子について、周りの直接情報や間接情報に基づき推測し、判断する。「さも」の場合は、話し手が目の前の状況や様子について、推測せずに、観察したものをそのまま描写する。

## 2. 「まるで」と「まさに」

### 2. 1 「まるで」

工藤（2000）によれば、「『まるで』『さも』『いかにも』は陳述副詞の下位分類の「比況副詞」に属している。」しかし、「さも」と「いかにも」は話し手が個人的判断に基づき、目の前の状況や述べられる対象の実際の様子を、そのまま描写することが多いのに対して、「まるで」は対象と直接の関係はなく、ただ相似点があるものによって、状況を誇張的に描く。「直接の関係がない」というのは「まるで」と「さも」及び「いかにも」などとの基本的な区別である。したがって、「まるで」の意味分析はこれまで見た二つの副詞の意味分析とは、やや異質なものとなる。

#### 2. 1. 1 先行研究

飛田・浅田（1995）は「『まるで』は典型的な状態にたとえる様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語にかかる修飾語として用いられる。後ろに『～ようだ・みたいだ』などの比況の表現を伴うことが多い。対象の状態がある典型的な別のものにたとえるというニュアンスで、類似の程度は問題にしない。かなり冷静な表現で、誇張などの暗示はない。」と説明している。一方、森田（1989）は「『まるで』は全体の姿や、性質・状況その他の有様がきわめて類似している様子を言う。状態形容として用いられる。」と述べている。さらに、『日本国語大辞典』（18巻）は「『まるで』はまさしくその状態に相当したり、類似したりするさまを表す。」と説明している。

#### 2. 1. 2 使用範囲の単一性

「まるで」は主に「ようだ」「みたいだ」などの文末表現と呼応している。砂川（1995）によれば、「『ようだ』、『みたいだ』はともに『推量』『比況』および『例示』という三つの意味を表す。」

(24) 「正月に私がお会いた時の印象では、随分弱気になっておられたよう

だ」と宇多山が云うと、「先月もそういう感じでした。」鮫島は少し声をひそめた。『迷路館の殺人』

- (25) 「どうしたの」というと、顔をあげて「部屋があたたかいものだから急に酔ったみたいだ」。『伸子』

ここの「ようだ」や「みたいだ」は比況や例示の意味を表すのではなく、「推量」を表すことになる。つまり「徴候性判断」である。(24)は相手のこの前の調子を基準にし、今観察した様子と較べて得た結論であり、(25)は部屋の状態から判断したものである。(24)(25)はともに話し手が観察した状況に基づき、推測したものである。「ようだ」「みたいだ」が「推量」を表す場合は、「まるで」と呼応して使うことができない。「まるで」は「ようだ」「みたいだ」と呼応する場合、「比況」しか表すことができない。

- (26) 「下宿を？君はよく下宿を取り替える人だね—此の頃あそこの家へ引越したばかりじゃないか」と毒のない調子で、**「さも／？まるで」**心から出たように笑った。『破戒』 = 【推量】

- (27) 丸坊主の親父が、首を振りふり、**「いかにも／＊まるで」**上手**「みたい」**にごまかしながら鯨を握っている様子も、眼前に見るように鮮明に思い出され『人間失格』 = 【推量】

(26)の「心から出たように笑った」は話し手が動作主の話ぶりや声など判断したものであり、比況表現ではないので、「まるで」と置き換えられない。(27)の「…上手**「みたい」**にごまかしながら鯨を握っている…」も、いろいろな周辺要素から推測したものであり、この場合も「まるで」と置き換えることができない。このように、「まるで」は「ようだ」「みたいだ」と呼応する場合は、「いかにも」や「さも」の推量と違い、比況を表すことになる。

### 2. 1. 3 述べられる対象の特徴

「まるで」によって述べられる対象は生物、無生物の両方である。

- (28) 一白内障の人の見え方は、ただ暗く映るのではなく、オレンジのように見えた。聴覚の方は、私達にはすごく大きくて、近くにあると判断できるような音でも、小さくて濁った音で、**「まるで」**すごく遠くにあるかのように聞こえた。(朝日新聞)

- (29) 待ちに待った雨が降り、**「まるで」**吸い取り紙のように水を吸い込む砂漠。(朝日新聞)

(28)では「まるで」によって述べられた対象物は「白内障患者の聴覚」であり、

「生物」のものであるが、(29)の述べられた対象物は「水を吸い込む砂漠」であり、「無生物」である。

#### 2. 1. 4 構文上の特徴

「まるで」は文末表現「ようだ」「みたいだ」などと呼応し、「比況」の意味を表すことができるが、文末表現と呼応しない場合でも、「比況」を表すことができる。

- (30) 「一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前と比べたら**まるで**赤ん坊と兵隊 **{φ / のよう / みたい}** だ。やろうと思えばいつでもやれるのじゃないか、君。』『銀河鉄道の夜』
- (31) それから助手の子供らは、**まるで**絵にある唐子 **{φ / のよう / みたい}** です。『銀河鉄道の夜』

(30)は十日前の状況と十日後の状況をそれぞれ赤ちゃんと兵隊で喩えられ、「ようだ」「みたいだ」のような文末表現と呼応しなくても、「比喩」の意味は変わらない。(31)も同じく、文末表現と呼応しなくても、助手の子供らを絵にある唐子で喩えられることが出来る。これは、文末表現の省略であると考えられる。また、「まるで」と「いかにも」はともに文末表現と呼応せずにつかえるが、違いが大きい。

#### 2. 1. 5 「いかにも」と「まるで」

「いかにも」と「まるで」は目の前の状況や様子を個人的判断によって結論を下すことを表すが、その判断の過程が違う。「いかにも」は話し手が自らの経験やあらゆる徴候によって、事実に近い判断を下すのに対して、「まるで」の使用範囲が比較的狭く、「比喩」しか表せない。「いかにも」と同じように個人的判断を下すが、結論は事実に遠く、誇張的である。恣意的描写であるので、「いかにも」と互いに置き換えられにくい。

- (32) 労働者は次に男に目をやった。男の顔は横を向いていた。これも頬は生きている人のように血色よく見えた。**{まるで / \*いかにも}** 酔って眠っている**よう**である。『点と線』
- (33) 待つほども無く、例の男が、ハアハアと息せき切って走ってきた。キョロキョロと **{まるで / \*いかにも}** ゼンマイ仕掛け**みたい**に忙しく周囲を見回っている。『女社長に乾杯』

「まるで」は普通文末表現「ようだ」「みたいだ」と呼応し、「比喩」を表す。(32)(33)は話し手が見た状況(直接的情報)に基づき判断したものである。しかし、

この判断は話し手が責任は負わずに恣意的に下した結論であり、真ではない比喩的なものである。(32)は死んでいる人のことを「酔って眠っている人」で喩え、(33)は男の姿を「ゼンマイ仕掛け」で喩えている。(32)(33)のいずれも真実ではなく、誇張的描き方である。

「いかにも」と「まるで」は両方とも目の前の状況や様子に対して、個人的判断を下すが、その判断の角度は違っている(徴候性判断と比喩)、互いに置き換えられない。

### 2. 1. 6 比較対象の総称性

「まるで」の比較の対象となる名詞は総称を表す名詞である。そしてその対象に典型的に備わっている属性を持っていることを示す。

(34) 彼はまるで鬼のような人です。[作例]

(35) 「その内容は聞きませんでした、今思えば、言うことを聞く振りをして、向こうの企みを探とくのだった。」

「まるでスパイ戦ね」と純子は苦笑いした。『女社長に乾杯』

(36) {=(33)}待つほども無く、例の男が、ハアハアと息せき切って走ってきた。キョロキョロとまるでゼンマイ仕掛けみたいに忙しく周囲を見回っている。『女社長に乾杯』

(34)~(36)の「鬼」「スパイ戦」及び「ゼンマイ仕掛け」はいずれも物事の総称であり、そのそれぞれの属性を「彼」「企業間の秘密探り」及び「例の男の様子」が持っていることを表している。

### 2. 1. 7 比較対象の象徴性

飛田・浅田(1995)は、「まるで」は「…かなり冷静な表現で、誇張などの暗示はない…」と述べ、森田(1989)は、「…全体の姿や、性質・状況その他の有様がきわめて類似している様子を言う…」と述べているが、不十分なところがある。

(37) 冴えない色の唇を、ほとんど血の気が失わせるまでに、左右に強く引き伸ばし、そこだけ見ると、まるで妖怪の形相である。『砂の女』

(38) ネット裏で観戦していた奈良市の大学生戸塚純子さん(22)はカクテル光線に浮かび上がるグラウンドに目をやり、「まるでプロ野球みたい」と喜んでいた。(朝日新聞)

(37)は口が左右に引き伸ばされた顔の様子を描写する文である。ここは、話し

手が「妖怪」でその顔の怖さをたとえる。人間のことを妖怪で喩えるのは、誇張的表現であると見られ、話し手はそれほど冷静ではないと判断できる。<sup>38)</sup>の『「まるでプロ野球みたい」と喜んでいた』の「喜んでいた」から、話し手の気持ちは興奮状態にあることが分かり、やはりあまり冷静な表現であるとは言えない。このように「まるで」によって述べられる比較対象は話し手にとって一つの特徴だけをやや象徴的に表現するものである。

「まるで」は視覚感覚に依拠した事柄を描写するだけでなく、体全体の感覚器官に依拠した事柄も述べる。また、「まるで」の比較対象は恣意的であり、話し手が目の前の状況に類似していると個人的に判断する状態に喩えることを表す。

## 2. 2 「まさに」

「まさに」は基本的に「比況」や「徴候性判断」を表さず、目の前の状況や様子について自信を持って判断することを表す。

### 2. 2. 1 先行研究

飛田・浅田(1995)によれば、『「まさに」』は[正に・将に・当に]はⅠ確信を持って判断を下す様子を表す。主体が自分の主観によって確信をもって判断を下すというニュアンスである。確信の程度は非常に強いので、しばしば対象をただ一つに限定して強調するニュアンスになる。Ⅱ現在の状況を強調する様子を表す。述語にかかる修飾語として用いられる。近い将来に物事が起こる場合と、現時点が強調すべき時であるという場合がある。」と説明している。

一方、『日本国語大辞典』(18巻)は『「まさに」』はⅠ一つの事柄や事態が、別の事柄や事態に確かに合致するという判断を表す。適切に。ちょうど。Ⅱある事態が、誇張やいつわりを含まない正確なものとして成り立つことを強調する気持ちを表す。正確に。間違いなく。Ⅲ(推量・命令などの表現を伴って)ある事態が確実に成立するようという、強い希望や命令などを表す。必ず、きっと。」と記述している。

しかし、これらの先行研究は「まさに」と同じ構文を持っている「いかにも」、「まるで」との区別について説明していない。

### 2. 2. 2 「いかにも」と「まさに」

「いかにも」と「まさに」は、文末表現と呼応しない場合、構文が似ているが、意味の上でも類似している。飛田・浅田(1995)によれば、「まさに」は確信をもって判断を下す様子を表す。これは、「いかにも」の「確認・同意副詞」

の場合（工藤2000）と相似している。

- (39) 今、麦畑が緑一色に萌え広がっています。それを「星の瞳」と呼ばれるオオイヌノフグリが縁を飾り、**「まさに／？いかにも」** 早春の輝きでした。（朝日新聞）

(39)の「まさに」と「いかにも」は互いに置き換えられれば、目の前の状況に対して、強調の度合いが変わるが、肯定的判断を下す意味は同じである。「いかにも」と「まさに」はともに「ようだ」や「みたいだ」などの文末表現と呼応して使うことができる。或は、文末表現と呼応せずに使うことができるので、「まさに」と「いかにも」の区別は明確にする必要がある。

- (40) テレする十円さえもなくて、落ちていないかと路面ばかり見て歩いた。  
**「まさに／いかにも」** 乞食だ。『二十歳の原点』

「まさに」は「だ」や「である」と呼応して「確信を下す」の意味を表す場合は、「いかにも」と置き換えられる。「判定」という意味では、「まさに」と「いかにも」は共通しているが、確信の度合いが違う。（「まさに」の場合は疑う余地がなく、強く信じているのを表すが、「いかにも」の場合はある特徴から状況を推測するに過ぎない。）(48)の場合は、「まさに」は「いかにも」に置き換えられれば、もともとの「確信をもって判断を下す」という強いイメージが失われてしまうことになる。

### 2. 2. 3 「まるで」と「まさに」

また、先行研究では、「まさに」について（『日本国語大辞典』）（「一つの事柄や事態が、別の事柄や事態に確かに合致するという判断を表す」）というふうに述べている。これは「まるで」についての説明（『日本国語大辞典』）（「まさしくその状態に相当したり、類似したりするさまを表す語。」）と似ているところがある。

- (41) それは **「まさに／まるで」** 悪夢のような一夜でした。

([http://119.city.nagasaki.nagasaki.jp/01\\_Japanese/19/04/pdf/723.pdf](http://119.city.nagasaki.nagasaki.jp/01_Japanese/19/04/pdf/723.pdf))

(41)の「まさに」と「まるで」が置きかえられれば文のニュアンスは変わるが日本語として非文にはならないので、「まさに」と「まるで」の使い分けを明らかにしなければならない。以下の例では、「まるで」と「まさに」がともに使用可能である。

- (42) その上に雪が積もると、**「まるで／まさに」** 白い綿の上に金閣が浮かんでいる**「みたい」**で。セグロセキレイが楽しそうに遊んでいますよ。（朝日新

聞)

- (43) {まさに／まるで} タイムマシンに乗ったかのような迫力と戦乱の時代を体感！ (<http://www.eigaseikatu.com/imp/4205/68645/>)

「まるで」と「まさに」は文の構造が似ている。また(42)の白い綿の上に金閣が浮かんでいる」及び(43)の「タイムマシンに乗った」のような誇張的な描き方は多く見られる。しかし、「(42)と(43)はそれぞれ「まさに」と「まるで」に置き換えられれば、構造上は非文にならないが、イメージは変わってしまう。「まさに」は述べられる対象の特徴にふさわしい事物の「唯一性」を強調し、それを確信することを表す。「まるで」に置き換えると、その事物の唯一性が失われる。そのゆえ、(42)の場合は、「白い綿の上に金閣が浮かんでいる」以外に、他のたとえ方もあるのを暗示しているが、(43)の場合は、「タイムマシンに乗った」という描き方でしか描写できない。

「まるで」と「まさに」は呼応する語に違いがある。

- (44) {まるで／? \*まさに} 子供のような人です。 [作例]

- (45) {まさに／? \*まるで} 子供です。 [作例]

(44)は子供のような大人という意味を表し、「まるで」しか使えず、(45)は子供という事実を確信するという意味を表し、「まさに」しか使えない。大人を子供に喩えるから、非現実である。非現実的なものを現実なもの結びつけるには、「ような」が必要である。(44)の「まるで」は「まさに」と置き換えると非文になり、(45)の「まさに」は「まるで」と置き換えると、文の意味が比況に変わり、「ような」が省略されていると解釈される。「まるで」は「ようだ」「みたいだ」などと呼応し、「まさに」は「だ」と呼応する。これを例で図式的に示せば次のようになる。

- (46) 彼はまるで鬼のような人です。

呼応関係

- (47) 彼はまさに鬼のような人です。

呼応関係

## 2. 2. 4 「まさに」の文全体を修飾する働き

森田・松木 (1989) によれば、強調を示す複合語「ことに(は)」は感情・感動を表す形容詞・形容動詞の連体形や動詞に過去・完了の助動詞「た」などが

ついた形を受け、その感情を事実として強調する表現である。

以上の「文の評価成分」は文全体を修飾する役割を果たすと考えられる。

(48) そして少しずつ主人が私の中に帰ってき始めた。**嬉しいこと**に夢を見るようになったのです。(http://202.229.187.46/ikiruchikara/inazawa.html)

(49) この間、私の家の近くに大火事があったが、**幸いなこと**に、類焼を免じられた。『INTENSIVE COURSE IN JAPAN』

(48)(49)の「嬉しいことに」や「幸いなことに」及び「驚いたことに」のように、形容詞、形容動詞、または動詞は「ことに(は)」の後接によって、全体で連用修飾語をつくり、副詞的な働きをすることになる。話し手の意志とは無関係に生じた事態について述べていて、その感情を事実として強調する表現である。「まさに」も文全体を評価し、修飾する働きを持っている。

(50) 米国は大きかった。遺族への救援は手厚く、補償は外国人にも行われた。決断の早さと懐の深さ。**まさに**世界のリーダーだった。(朝日新聞)

(51) しかし、図録には恩地孝四郎『飛行官能』(1934)の全ページをはじめとして、**まさに**「眼福」と云いたくなるような美しい本の図版がみられるので、トーゼン買い。(http://www.aguni.com/hon/back/93.html)

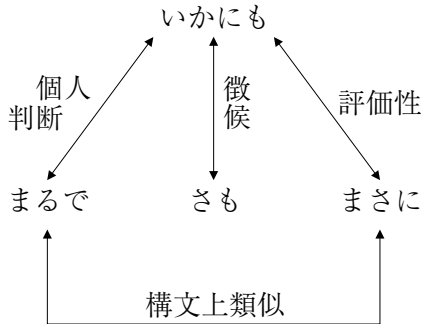
(50)(51)の「まさに」はいずれも話し手の個人的な評価を強調している。(50)の「世界のリーダー」(51)の「眼福」は話し手が事態に対して強く確信と判断を下す表現である。「まさに」は「悲しいことに」や「嬉しいことに」などのように、副詞として、文全体を修飾する働きを果たしている。「いかにも」や「まるで」などに置き換えられれば、話し手の強い確信と判断の意味が変わってしまうことになる。

### 3. 終わりに

「いかにも」は「比況副詞」として「まるで」と「さも」と関連しているが、「確認・同意副詞」や「譲歩副詞」のとしては「まさに」に近い。「いかにも」「まるで」はともに個人的判断が働いていることを表すが、「まるで」の「誇張的、恣意的」の比喩的特徴は「いかにも」と区別している。「さも」と「いかにも」はともに「徴候性判断」を表すが、「さも」の場合は、個人的判断の度合いは弱く、「客観的」であるので、「いかにも」と違っている。また、「いかにも」と「まさに」はともに確信をもって判断を下す様子を表すが、その「確信」の

度合いが違っている。さらに、「まさに」と「まるで」は日本語の構造上似ているが、それぞれ呼応している部分が違うので、ニュアンスが違う。

以上から、四つの副詞の全体像は次の図のようにまとめることができる



(図1)

## 参考文献

- 工藤 浩 (2000) 『副詞と文の陳述タイプ』 岩波書店  
 砂川有里子 (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版  
 田忠魁・泉原省二・金相順 (1998) 『類義語使いわけ辞典』 研究社  
 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版  
 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』 岩波書店  
 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』 くろしお出版  
 仁田義雄 (2000) 『認識のモダリティとその周辺』 岩波書店  
 日本大辞典刊行会 (1979～1981) 『日本国語大辞典』 小学館  
 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版社  
 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店  
 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』 株式会社アルク  
 山田孝雄 (1936) 『日本文法論』 宝文館

## 例文出典

CD-ROM版 朝日新聞（聞蔵 朝日新聞）名古屋大学付属図書館

CD-ROM版 新潮文庫の100冊

綾辻行人（1992）『迷路館の殺人』講談社出版